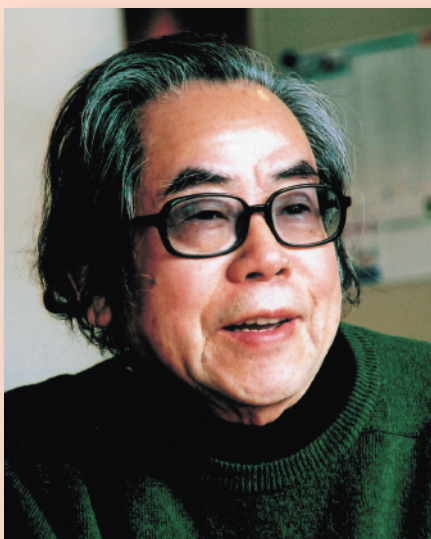




小説

ふるかわ
古川 薫
かおる

下関市・宇部市
(1925～2018)



提供・吉岡一生

【著作】

『砲煙の海』(昭和39・午後同人会)
『漂泊者のアリア』(平成3・文藝春秋)
『わが長州砲流離譚』(平成18・毎日新聞社)

ほか

【閲覧情報】

下関市立近代先人顕彰館(田中絹代ぶんか館)

古川家は本来広島島の旧家であったが、薫の父がエンジニアで当時下関の旧国鉄幡生工機部に勤めていたことから、大正十四年六月五日下関市大坪町で出生。

六歳の時一家は宇部市に移住し、薫は県立宇部工業高校を卒業。小学生の頃から作文が得意であったが、戦時中でもあり、父と同じエンジニアを志して飛行機製造会社等に就職。昭和二十年に召集され、陸軍の航空通信兵となり沖繩に向かう直前に終戦となる。

その後再度勉学に挑戦し、山口大学教育学部を経て、母校の宇部市立神原中学校の教壇に立つ。この間山口県の懸賞小説で佳作に選ばれたことなどもあり、文学への夢を育んでいく。

昭和二十九年、下関市に本社のある、現・みなと山口合同新聞社に転職。新聞記者の仕事の傍ら、地方の同人誌に作品を発表し始める。

その文学活動が本格化するきっかけは、市政担当記者として活躍中に知己を得た中原雅夫や清永唯夫等と、昭和三十六年、同人誌『午後』を創刊したことにある。

昭和三十九年、『砲煙の海』を『午後叢書』として出版。昭和四十年、『午後』十号に発表し同人雑誌推薦作品として『文學界』に転載された『走狗』が、直木賞候補となり大きな注目を集める。

受賞には至らなかったが、ここに直木賞という目標を得て、筆一本でやっつけていこうと決意したのが四十五歳の時であった。以後文筆活動に専念し、精力的に作品を発表。

平成三年、『漂泊者のアリア』で待望の直木賞を受賞。下関に所縁の深いオペラ歌手藤原義江の生涯を描いた作品で、平成五年にオペラ上演された。

昭和四十一年、海外取材の折、パリのアンヴァリッド軍事博物館で攘夷戦の戦勝品として持ち帰られた長州砲を発見。その返還運動を展開して奔走し、実現させる。その実物は現在、下関市立歴史博物館に展示され、来館者は親しくその雄姿を目の当たりにすることができる。

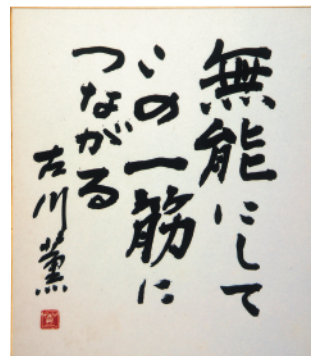
作家活動のみにとどまらず、地域の多岐に亘る文化振興に尽力を惜しまなかった足跡は大きい。平成二十八年、取材中の転倒事故で入院後、額に悪性腫瘍のあることが判明し加療を余儀なくされるも、病床で意欲的に執筆に専念。翌年、『維新の商人 語りだす白石正一郎日記』を出版。

単行本として百二十三冊目に当たるもので、最後の仕事となった。

(文・清永唯夫)



古川薫文学碑・東行庵(下関市吉田) 提供・吉岡一生



直筆色紙 提供・吉岡一生